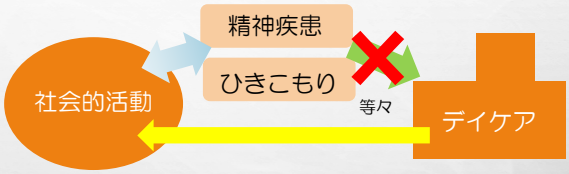
少人数制デイケアによる社会復帰支援

医療法人社団　五稜会病院
春名大輔、島谷朋郁、櫻井優子、鈴木大輔、鍛冶志保里、中島公博、千丈雅徳

はじめに



❒当院では少人数での活動から社会復帰を目指すデイケアを2010年6月より開設。

今回、利用者の転帰および症例報告を通して社会復帰を目指した支援の有用性や課題について考察したため、報告する。

デイケアの活動内容

・活動は週1回。
・利用を継続することを最優先とし、利用者が希望する活動を実施。

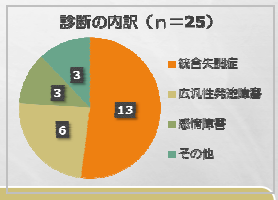
☆カードゲーム
☆ボードゲーム
☆卓球
・カラオケ
・TVゲーム
・物作り
・料理

活動は当日の利用者の希望により決定。
↓
・SSTなどの専門的な介入を望む人がいない。
・専門的な介入には興味関心が乏しいよう。

方法

❒2010年6月から2013年11月にデイケアを導入した25名を分析の対象とした。25名中19名に何らかの社会的活動への不参加の経験が認められた（Figure 1）。

対象者
男性13名：女性12名
平均年齢：25.96±5.94歳
平均利用日数：
381.80±384.83日



対象者の転帰および、症例の経過からデイケアの有用性を検討した。

社会的活動への不参加の有無

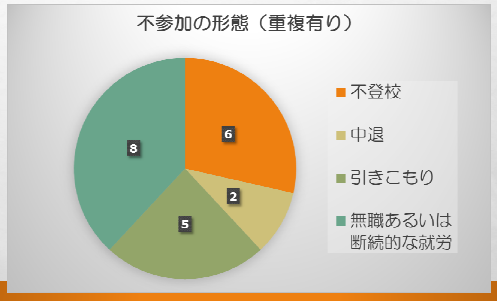


Figure 1. 19名の不参加の形態

結果①～転帰～

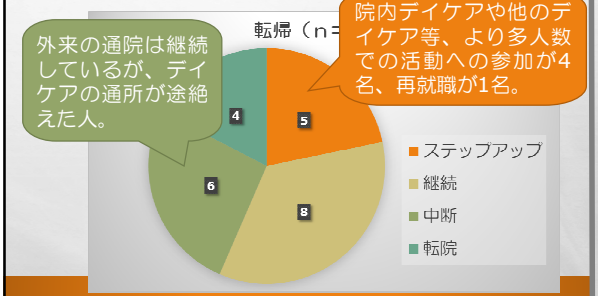


Figure 2. 対象者25名の転帰

結果②
～症例～

30代　男性　神経症性抑うつ状態（発達障害疑い）

X－5年　　就労の失敗から引きこもり生活

X年11月　　当院初診。個人心理療法を開始。発達障害の疑いで知能検査を実施。確定診断とはならず。

X＋1年2月　コミュニケーション能力の向上を目的に少人数制デイケア導入。

結果②
～症例の変化～

初期
- 人に会うと困るのでごみを出しにいけない
- 話しかけられると困るのでレジに並べない
- デイケアでは知っているスタッフとの会話中心

→

経過（1年８ヶ月）
- ごみ出し、レジに並べるように
- 冗談を言って場を盛り上げたり、他メンバーとも会話
- 週に1回の通所でも精一杯
- 次のステップに移行中

考察と今後の課題

- 転帰から、少人数制デイケア活動が社会復帰支援に一定の効果がある可能性が示唆された。少人数制であること、活動負荷の低さによるものと考えられる。
- 症例から、定期的に安定した通所を続けることが日常生活上にもポジティブな変化を生じさせる可能性があることも示唆された。繰り返し対人場面に直面することで、対人場面に対する緊張の低下や対人スキルの向上が得られたためと考えられる。
- 中断の要因を詳細に検討し、デイケア活動の改善に役立てていくことが今後の課題と言える。